

Title	営利衝動論 (其一)
Sub Title	
Author	気賀, 勘重
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.3 (1910. 9) ,p.277(31)- 286(40)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100900-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

30 しならん。一利は一害を伴ふ。亦是れ已むを得ざるの數乎。

自由黨内閣の議會法案は未だ下院の討議に上らず、英國貴族院問題は今や休戦の姿に在り。エドワード七世の崩御後、自由統一兩派の領袖は新時局に顧みる所あり、成るべく危機の激甚を避けんがため妥協の途を求めんと欲し、會見を重ねたりと雖も、未だ何等の要領を得ざるが如し。想ふに自由黨は其の戦闘力に就て心中不安に堪へざる者あり。又統一黨は未だ獨力以て政局を支配し得るだけの實力を有せず。故に彼等は共に妥協成立を有利とせん。然も愛蘭黨及労働黨は姑息なる妥協に爆裂彈を投せんと欲して、決皆監視しつつあり。今後の成行果して如何。此際に於て予の斷言するを得るは、議會法案に重大なる缺點を含み、危機の解決亦非常に困難なるが如きも、一八三二年以來の民主的急激の大傾向は、唯進むあつて退くを知らざるべき事、即ち是れのみ。(完)

營利衝動論(其二)

氣 賀 勘 重

31 快樂の増進又は苦痛の減少を目的とせる身體の外部の運動と爲りて現はれんとする傾向を有する心意の情的状態之を稱して衝動と云ふ。既に一種の情的状態なる以上、快樂を求め又は苦痛を避けんとする感情の之に伴ふものなかる可らざるは勿論、此感情に伴ふに更に之を慰せんとする一定の身體的運動を惹起すの傾向を以てせざるに於ては吾人は之を衝動と名づくるを得ず。又縦令ひ斯る傾向ありとするも其運動の目的を多少意識するに非ざれば等しく之を衝動と云ふを得ず。快樂及び苦痛の感情が人類をして不明瞭ならざるも多少其目的を意識せる一定の欲求を爲すの性癖を生せしむる時は其感情は此に初て衝動として現はるゝなり。故に動物の場合に於ける所謂本能は即ち人類に於ける衝動に相當するものにして、吾人が單純なる感情的動機に驅られ半ば無意識的に常に一定の

32

行爲に出づる、其行爲の原動力は即ち此衝動に在るなり。而して單に此衝動に基づけるの行爲、詳言すれば反射運動、自動運動等の如く全然目的を意識せざるの行爲にも非ず、然りとて熟慮靜思の結果に出でたる明確なる有識的行爲にも非ず、其中間に位して大體其目的を意識せるも其目的物並に之を得るの方法に對する意識多少不明瞭なるを免れざるの行爲を特に稱して衝動的行爲と云ふ。

衝動は其結果として現はるゝ衝動的行爲より觀れば千差萬別一々之を枚舉するを得ず。行爲の原動力としての其有無並に強弱共に人に依り、人種に依り將た時代に依りて異なれりと雖も、普通世人が認めて以て衝動と爲すは一定種類の人間又は人類全般に共通なる衝動なるの常にして、此種の衝動亦實際に甚だ少なからず。吾人日常の行爲上に於ける其作用は實に甚だ大なるものあるなり。渴しては飲まんとし、飢ゑては食はんとし、無爲に處しては活動せんとし、衆人の間に處しては他に拔でんとす。即ち何れも此衝動の作用ならざるはなし。殊に未開の人類に在りては一切の行爲活動殆ど悉く衝動に支配せらるゝと恰も鳥獸の行動が全然本能に支配せらるゝに等しきの狀あり、從て其日常生活は殆ど全く衝動生

33

活たるの實なきに非ず。知識道德の進歩に従ひ將た社會文明の發達に伴ふて單純なる感情に支配せらるゝ行爲は熟慮反省の結果たる種々の觀念の爲に制馭せられ、行爲の動機たる感情の性質亦漸く複雑と爲りて、所謂衝動的行爲は漸く熟考的執意的行爲と爲るに至ると雖も、然りとて衝動は此變遷と共に全然消滅し去れるに非ず。消滅し去れるは純乎たる衝動的行爲のみ。衝動其物は決して消滅することなく、唯、單に其結果の上に變化を受けたるに過ぎず。當今の未開人と文明人若しくは下級人民と上流人士との間に於ける性的衝動、活動的衝動又は營利衝動の外面に現はるゝ相違を觀れば、衝動が其結果を實現する形式の此變化は即ち明に之を認め得可しと雖も、衝動其物は依然として變ずるなく、常に行爲を喚起するの原動力として其實を存せるなり。訓育、教化、訓練等に依りて性癖を矯め良習慣を養成せんとするは一見此衝動を抑止せんとするものたるの觀なきに非ずと雖も、衝動は到底全く、之を抑止し得可きものに非ず。薰化教育の事業も亦敢て之を抑止せんとするものに非ずして、唯、單に此衝動の結果に現はるゝ形式を變更して文明的人生の目的に適合せるものたらしめんとするに外ならず。人類行爲の

34

研究上衝動の性質及び作用は今尙ほ決して漫然之を看過す可らざるなり。經濟學の研究上衝動の性質及び作用を明にするの必要ある所以實に此に存せり。

然れど衝動には前述の如く種々の別あり。而して此等各種の衝動中斯學の研究に取りて最も重大の關係を有するものは營利衝動と稱する一種の衝動なり。營利衝動とは營利を目的とせる衝動詳言すれば吾人を驅りて營利を目的とせる各種の行動に出でしむるの衝動を云ふものにて、方今世人が通例益々多大の貨財を收得し蒐集するに苦心し、其集得蒐積を目的とせる各種の營利的行爲に出づるの傾あるは概ね此衝動の結果なり。

由來衝動の分類及び其概念に關しては近世心理學者の見解區々に分れて未だ統一する所なく、從て所謂營利衝動なるもの、衝動分類上如何なる種類に屬し、爾餘各種の衝動と如何なる關係に在るやは吾人未だ俄に確言するを得ずと雖も、今諸學者の列擧せる各種の衝動を概括して之を觀れば、自己の生存を維持せんとする所謂自存衝動と異性に對する所謂性的衝動及び心身の活動を目的とする所謂活動衝動並に他の同類をして自己の存在を認知せしめんとする所謂認識衝動及

35

び爾餘の同輩に卓出せんとする所謂競争衝動の五種は其主要なるものなり。就中自存衝動と性的衝動とは其本源最も古く且つ其作用最も強烈なるものにして、人生一切の推移動搖は一に飢と愛とより起るとの古諺は正に此事實を云ふものに外ならず。此兩種に次ぐは活動を求むるの衝動にして其由來の古きこと亦前二種に譲らずと雖も、第四及び第五即ち認識衝動と競争衝動に至りては之に反し、其發生には複雑なる感情的要素と幾多の觀念とを要するものにして其發達の順序より云へば亦遙に前三種の後に在りと云ふ可く、前者の其本源を自然的肉體的の根本感情に發せると反對に、社會的生活を待ちて初て生ずる感情に其端を發するの實あり。故に認識及び競争の衝動は人類の原始状態に於ては通例前三種の如く人類活動の原動力として強烈なるものに非ずと雖も、少しく進歩せる社會殊に輓近の文明社會に於ては其強度必ずしも前者に劣るものに非ず。否な文明の進歩一定の程度以上に達せる社會に於ては個人並に團體の雄大なる事業は寧ろ多く此種の衝動に出づるの風あり。何れにもせよ個人並に團體の裡に存する此種の衝動は殆ど全般の人類社會に見る所にして常に進歩の原動力たり、將た社會

36 に於ける種々なる生存競争上の争闘を惹起すの原因たるなり。而して此類別より觀れば吾人の所謂營利衝動は幼稚なる社會に在りては第一種に屬する一種類たることある可しと雖も、所有權の制度發達せる國民間に在りては第五種即ち競争衝動の一種類に屬せり。他に超ゆるの富を得依て以て社會上の名譽權力其他人に超ゆるの快樂を享得せんとする其情は實に現今に於ける營利行動の動機たるなり。

二

此營利衝動が吾人今日の人類の經濟に及ぼす影響は頗る大なるものあり。商業及び交通の發達、企業の新形式及び大經營の發展、市場の擴張、經濟的競争の増進等觀じ來れば經濟上に於ける一切の進歩發達は殆ど悉く此衝動の結果に外ならざるの感なきを得ず。近世經濟學の初期に當り經濟學者が一般に此衝動を基礎として一切の經濟現象を説明せんと試みたるも亦宜なりと云ふ可し。

人類行動の原因を闡明せんとする思想家が自愛心、利己心を以て其原因と認め一切の行爲、一切の徳性の本源悉く此一原因の裡に在りと爲すは古來哲學史上に

其例少なからざる所にして、希臘の詭辯學者及び快樂主義者は勿論、近く十八世紀に於ける「ホッブス」「マンデヴィル」「ヘルヴェチアス」より「ベンタム」一派の學者に至る迄皆之に屬せり。就中十八世紀の後半期より十九世紀の中葉に至る其間は斯説の敷衍者最も多かりし時代にして經濟問題の攻究上には殊に此思想の一世を風靡せるあるを見る。此間に發達の端を開ける近世經濟學が此思潮の支配する所と爲れるは蓋し自然の勢と云ふ可きなり。

即ち斯學の鼻祖「アダム・スミス」氏は穩健なる倫理學、心理學者として其所説一般に公平なるものあるに拘らず、唯り經濟問題に關しては單に自利を謀らんとする各人自然の性向を云爲し、此性向の作用を以て大體上頗る有利なりと認むるもの如く、常に其作用の結果に對して樂觀的の言説を爲せるの風あり。而して氏を祖述せる「リカード」初め英國一派の經濟學者と、「ロツツ」其他の獨逸官房學派とは其轍を踏みて更に之を敷衍擴張し一般的學説を立て、曰く、利己心、自利心、營利衝動は國民經濟の唯一の基礎なり、其現象を支配する唯一の原則なり、爾餘の科學は兎に角少なくとも經濟學に於ては吾人は唯この衝動より生ずる結果を研究す可き

38 のみと。就中、ベントム氏は人類の幸福各種を研究せる後、論結を下して曰く富に對する喜悅は一切の喜悅の中心點たり、蓋し富は爾餘一切の快樂を得るの手段なればなりと。シニオル氏は曰く各人は可及的最少の犠牲に依りて可及的多大の幸福を得んことを欲するものなりとの原則は經濟學學理の基礎なり、明々白々更に其當否を調査研究するを要せざる最根本の事實なりと。ラウ氏も亦物質的貨物と人類との關係を以て一種不變の關係と爲し、常住不斷の衝動力として利己心の存在を認むるに非ずんば國民經濟上の原則は一も之を確定するを得ざる可しとの斷案を下せり。勿論、此等學者の推稱せる所謂利己心、自愛心等は語義全く營利衝動と同一なるものに非ず。營利衝動なるもの、作用の單に經濟上に存するのみなるに反して、廣く人類の行爲の他の方面にも其作用を現するの感情なれども、併し、經濟上に於ける其發現は少なくとも現今の經濟社會に於ては營利衝動の根本感情として現はるゝの實あり。以上諸學者が經濟的行爲の根本として之を論ずるも亦實際上營利衝動と同一視して其作用を云爲せるの狀なきに非ざるなり。

さはれ斯の如く營利衝動を以て經濟的行爲の唯一主要の原動力と看做すの詭に對しては、ラウ氏自身既に多少の制限を加へ、爾餘の學者も亦多少其解釋に變更を加へたる者少なしとせず。就中、多數の學者は利己心を以て自愛心又は進歩せる自利心の意義に解釋し、此精神は高尚なる人士に在りては單純なる利己心以外の幾多の高尚なる目的をも包容せるものなりと爲すの狀あり。又、ヘルマン「ロツシヤ」グニス「ザックス」等輓近の學者中には共同的精神、正義心及び他愛心を以て營利衝動と等しく人類の經濟的行爲を説明するに必要な衝動と看做す者も少なからず。更に、ジョン、スチュアート、ミル氏の如きは經濟的現象を初め各種の社會的現象が人性各種の性質に支配せらるゝの實を認めつゝ、然かも致富の願望即ち營利衝動を以て國民經濟の唯一原因と爲すの學說を辯護せんが爲めに說を爲して曰く、經濟學は此願望の結果のみを研究するを事とする一種の假說的科學なり、故に其研究の結果は此假說の唯一原因が諸原因全般と異なれると等しき程度に於て實際の事實と相違せるものなりと。

40 ならず。然りと雖も所謂私經濟制度の現象を説明するに際しては之が原因を營利衝動に歸するの說今尙ほ甚だ少なからず、殊に價格問題の研究の如きは殆ど悉く利己心の作用を唯一主要の前提として之を試むるの風あり。而して當今の實際より觀るも吾人の經濟的營利的生活は營利衝動と密接の關係を有すること國家的並に宗教的生活其他の生活方面よりも遙に大なるものあるなり。然れば斯學研究上一種必須の前提として此衝動の作用を認むるは勿論之を是認せざるを得ずと雖も、此衝動が果して舊學說の如く一切の經濟的行爲の根本的厚始の原因なるや否やに至りては既に大に疑なきを得ず。而して若し前述の新派學說の如く、他に種々なる原因、原動力の經濟的現象を左右するものありとせば其原因原動力に對する此衝動の關係如何の問題は又此に之を明にするの必要なきを得ず。併し、此等の諸點に關する疑問は先づ所謂營利衝動なるもの、由來及び發達を明にするに於ては概ね之を闡明し得可きが故に、吾人は此に少しく其由來及び發達に就て序する所ある可し。(未完)

米布合併の先例 (其二)

板倉 卓造

(一) 日韓合併と米布合併

一國が其存立を失ひて、他國に合併せらるゝの例は、古來の歴史に珍しからず。近代に於ても、一八九六年佛國のマダガスカル、九八年米國の布哇、一九〇〇年英國のトランスヴァール、近くは一昨年、白耳義とコンゴ自由國との合併の如き、其最も著名なるものなり。是等の先例を、今度の日韓合併に比較するに、韓國が我保護國より一轉して合併せられたるの事實は、マダガスカルが最初佛國の保護國にして、後に合併せられたるの事實と酷似するが如くなれども、之を米國が布哇を合併するに至りたる前後の事情に對比すれば、日韓合併は種々の重要な點に於て、前者よりも寧ろ後者に類するを認めざるを得ず。即ち米布の合併は、少なくとも左の四點に於て、日韓合併と其事情を同じくするものと云ふ可し。

41

一、米國と布哇との地理上の關係は、米國が將來政治上に、通商上に、太平洋に其驥